

台湾騎樓の〈辺街〉空間における領域形成

—環境行動の分析から—

林 政霆

1. はじめに

1-1 騎樓とは

騎樓とは、基準に沿って道路に面する建物の一階部分に一定空間を設け、セミパブリック的な半戸外空間にする建築形式である。隣り合う建物がそれぞれに空間を設けた結果、屋根のある歩道が形成され、騎樓となる。

1-2 台湾騎樓形成の背景

台湾騎樓の形成には、①歴史、気候、②商業、③都市計画などの背景がある。中国華南地方からの移民により、台湾での高温多雨の環境に適した「張り出し屋根」が伝えられた。屋根下の空間は店舗の延伸として使われ普及し、さらに日治時代に「市区改正」により、騎樓の建築形式がさらに確立してきた。

1-3 台湾騎樓の現状

都市化により人と車、バイクの数が増え、限られてる騎樓空間の中に人々の考え方が変化し、たまに衝突が起こりつつある。歩行者や障害者は『自分たちが安全に通る権利がある、私物は騎樓からなくして欲しい』、ライダーたちは『都市が提供する駐輪空間が足りない、騎樓に自転車やバイクを止めたい』と考えている。一方、店や住人は『自宅前の空間の利用は個人の自由であり、他人には進入して欲しくない』と考えている。また政府は『騎樓が多くの問題を起こしているため、騎樓における全てのもの、さらには騎樓自体の空間をなくそう』と考えているようである。

1-4 まとめ

250年前の清時代から、日治時代、戦後そして現代に至るまで、騎樓は台湾人の生活と一体になってきた。台湾 921 大震災の後、騎樓の建築形式の構造強度は大きく疑われ、さらに景観混乱の問題、所有権と使用権の紛争によって、法的に騎樓を続けるべきかどうか議論になったようである。しかし、やはり騎樓は昔から続く親近感のある空間であり、生活習慣もすでにこの空間に溶け込んでいる。

2. 騎樓空間のフィールドワークによる概観把握

2-1 騎樓の空間種類の現状調査

騎樓は通路として定義されており、本来は「通行」

目的以外のものを設置してはならない。しかし、実際の騎樓には、様々な現象が見られる。その現象を下記のように概略に分類して示すことができる(写真 1-6)。



写真1 駐輪



写真2 出店



写真3 料理



写真4 接客



写真5 展示



写真6 作業

2-2 現在までの騎樓研究

今まで様々な視点で騎樓に関わる研究が行われており、大きく分けると①歴史、空間類型、②都市問題意識、③防火、④構造、⑤使用権、⑥場に分類できる。その中に、騎樓を「場」として議論することは少ない。王曉玲(1998)の内街における分析と、蔡瑞麒(2002)の公私領域の不安定構成の概念には、台湾の騎樓空間で独特な特徴を示したと考えられる。それらの特徴をさらにどう人々の行動と繋ぐだろうか。

2-3 まとめ

現状調査により、私有化という現象はあるが、支障や干渉と言うよりその間になんらかの関係性が見える。騎樓の内部と外部は、それぞれの使用現状が存在する。この混在している状態により、台湾の都市景観が形成される。もう一つ気になったことは、騎樓の反対側で、つまり騎樓の外側から観察していた時のことである。騎樓と車道の間、臨時駐輪、駐車も見られる。道路の端で遅い速度で逆行するバイクや自転車もいた。その上、本来歩行者は騎樓内で歩くべきなのに、騎樓と車道の間で歩くことも少なくない。出店の外側、つまり騎樓と道路の間に、もう一つの「街」は存在しているのではないかと。道路と建築の間に、名付けのできない「領域」があるかもしれない。その領域は、騎樓からのなんらかの勧誘要素があり、人を近づけさせる力があるのではないかと。そして法的に規範されていない行動が、ここでは許されるのではないかと。

3. 問題と目的—騎楼と言う「場」

3-1 問題

今までの研究は、騎楼の内部を注目することは多いが、実は騎楼の行動がもたらす都市現象は、騎楼の外部も含めて発生することが多いことに気づいた。ここで指している騎楼外部は、道路の端側の部分である。騎楼の外でどんな行動が発生しているのだろうか。

この<騎楼—道路>領域を、騎楼に接する街の両側にある部分なので、本研究では仮に<辺街>と名付けたいと考えている。

都市空間を整えるには、法律をきちんと制定して計画する必要がある。しかし法律の予想をこえて発生した都市空間での現象は、都市の悪というより都市の個性を反映する重要な手掛かりになるかもしれない。同様、辺街空間で発生する現象は、都市計画や法律には書かれていないものだが、都市にとって必ずしもマイナスなのか。それとも他に重要な意味があるのか。

3-2 目的

本研究の目的を簡単にまとめると、3 点に挙げられる。

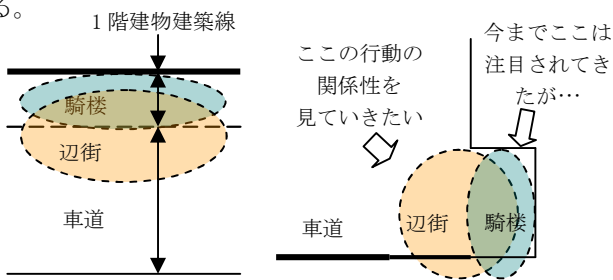


図1 <辺街>空間

- ①<辺街>空間にどんな行動が存在するか
- ②<辺街>空間で存在する行動がどのように<辺街>領域を形成するのか
- ③<辺街>領域はどのような性質をもつのか

4. 方法—騎楼の行動観察

4-1 観察場所の概要

今回は、商業性質の濃い地区（以降、商業地区と称す）を研究ターゲットとして行動を観察する。具体的な目標は、台湾の台南市内、台南駅東側のある街区にした。この街区は、台南市の中西区に位置して、外側にはメイン通りの大学路、勝利路そして育樂街があり、台南駅までの主要動線上にある。周辺には大学などの教育施設に囲まれており、飲食、生活関係の産業は活発していてにぎわっており、店舗、出店も数多くある。

観察方法としては、ビデオカメラを定点に設置して、一日中の各時間帯で撮影した。ビデオ撮影の時期は2009年8月と10月で、平均気温30度以上の気候環境である。カメラは、通行者に見えるが、動線に邪魔に

ならないところに設置した。本研究は、観察街区の中に4つの場所を選んで撮影を行った。

4-2 各場所の行動観察

撮影した映像をもとに、発生した環境行動を時間の流れとともに文字記述、平面図、写真、気づきの4つの要素にまとめて、観察記録表を作った(表1)。

状況1-7	午後4時50分、一人乗りのバイクが出店(ケバブ、煮豚屋)へ	
①	00:00 バイク乗りの女性が、ケバブの出店へ接近した	
②	00:28 バイクの女性が、バイクに乗ったままでお金を渡した	
③	01:05 バイクに乗ったまま、足でバイクを進めた	
④	01:45 煮豚屋で注文する。その後ケバブ屋はビニル袋を持ってきた	
⑤	01:48 ビニル袋を渡され、そのままバイクに乗って帰っていた	
⑥	02:16 バイクに乗ったまま煮豚屋に商品を渡された	
⑦	02:37 バイクの女性は交差点を渡って、いった	
気づき	<ul style="list-style-type: none"> ● バイクの女性は注文、持ち、渡されるまでバイクを降りていない ● ケバブ屋は自分の出店前ではなく、隣の出店のところまで商品を持ってきた。 	

表1 観察記録表例

4-3 気づきの整理

4つの観察場所の観察から43個の行動事例を取り上げたところ、様々な行動が見られ、さらにピックアップすることができた。ピックアップされた行動を概観しながら、共通点と相違点を取り上げた。

4-3-1 出店で買い物

<出店で買い物>という行動は、大きく言うと出店へ接近し、買い物をし、そして再び道路に戻っていくサイクルという<接近-取引-去る>のサイクルとなっている。出店の店員と顧客の対応状況については、基本的に店舗を挟んで取引することが多いが、細かな相違は観察されており、店員と顧客の対応は、一つ固定のパターンとは限らない。

4-3-2 駐輪

辺街空間での駐輪は、入る予定の店舗か出店の前で

駐輪することが一番多い。昼間になり、交通量が増え、駐輪数も増えてくると、辺街空間で店と垂直方向で一列に駐輪する観察により伺える。辺街に自動車や駐車することがあっても、駐輪との間にぎりぎりバイクが入れるスペースが確保されていることが伺える。

4-3-3 通りかかる人と自転車の混在

辺街と道路を区別する線ははっきりしていないので、辺街で歩く人々は自転車やバイクとすれ違ふことがある。一見、歩行者にとっては危険や恐怖を伴う経験であり、避けたり歩く速さを緩めたりしそうなものだが、バイクや自転車とすれ違ってもあまり速度を変えない。辺街で歩行者も順行方向だけではなく、逆行方向で歩く人もいる。

4-3-4 方向の転換

方向転換は、自転車やバイクが道路から辺街へ接近するとき、或いは辺街から道路へと出ていくときによく見られる。バイクでも自転車でも、方向を転換する際には時間はそんなにかからない。そして転換する際にもし通過する人やバイクがあるとき、通過者は止まらずさらに外側を通ることがよく見られる。

4-3-5 待ち

辺街でもうひとつよく見られるのは、何かを待っているシーンである。もし複数の人だったら、待っている間にお喋りしたりすることも見られる。商品待ち以外に、人を待つための空間とも見える。

4-3-6 出店経営者の行動

出店経営者は、出店により常に辺街にることと、商品の渡しや整理の時だけ辺街に出ることも様々な類型が存在している。騎楼の出店は、客がいない時出店の後ろにずっといるのではなく、近くの物を利用して辺街で座ったり寄ったりして休憩を取ることが見られる。

4-4 まとめ—辺街空間での行動の特徴

観察された行動の中に、単一行動ではなく「...しながら...」と「...したままで...」のような二つ同時に進行する行動がよく見られる。その<しながら>行動、<したままで>行動は、長く維持することが少なく、すぐ次の行動へ移行することが多くて、むしろ暫時的な一面が見られる。なお、辺街空間ではさほど歩行者や自転車、或いはバイクのいずれに優先性があるのかは明確ではなく、むしろ辺街空間ではこれらが同時に存在していると言える。

5. 考察—<辺街>はどのような場であるか？

5-1 考察 1：どんな行動が<辺街>空間で存在しているのか

辺街空間で発生している行動は、第四章で述べたように様々な種類が存在している。これらの行動の種類を動きという観点で分けると、大きく三つのカテゴリに分けられる。この三つのカテゴリは、接近(去る)、停留、そして通過である。上記の三つのカテゴリに分けることで、辺街での行動を整理することができた。これらの行動は、本来都市計画には予測されていなく、法律的合法性も不明確である。しかしこれらの環境行動は台湾の都市現状を表現している。そして合法か否かを問わず、台湾都市住民の生活習慣をもある程度反映している。

5-2 考察 2：行動はどのように<辺街>領域を形成するのか

本来道路は車道として自動車、バイクや自転車が走るため、騎楼は歩行者のために設置すると考えられる。図2のように示すことができる。

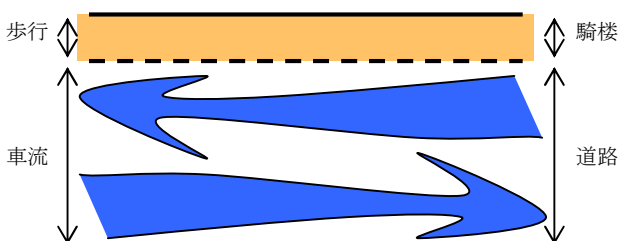


図2 本来の騎楼—道路関係

しかし現状として騎楼の外には接近、停留、経過など様々な環境行動が辺街空間に存在しており、騎楼と道路の間にもう一つ性質の違う領域ができています。接近、停留、経過などの環境行動を実際に空間に置くと、図3のように見える。騎楼と道路の間に、接近(道路と辺街の間の線を越えた矢印)、停留(丸い記号)、移動(辺街内の矢印)などの行動が見られ、実際に都市計画に存在していない、幅が変動する境界線が現れた。

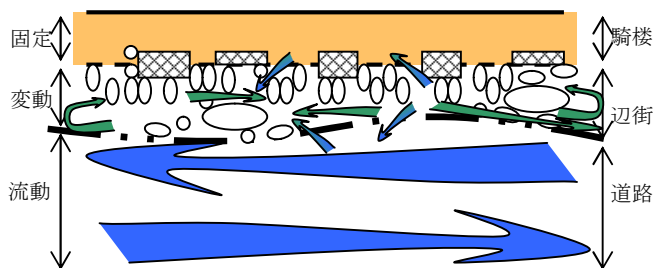


図3 辺街領域の概念

● 「フロー」と「レイヤー」の概念

辺街空間には、「フロー」と「レイヤー」のような構成が見える。「フロー」とは、バイクや人などの動きで、短期間そして多方向の移動方法が存在している。「レイヤー」とは、動静そして対象の種類などによる並び方の階層らしきものである。

5-3 考察 3: <辺街>領域はどのような性質をもつか

騎楼のような低層部がセットバックした空間は、道路と建物の緩衝空間として認知されている。しかし辺街で発生している行動の性質によって、もう一つの緩衝空間が見えてきた。辺街の緩衝性は、騎楼内の緩衝性とはまた性質が違うと思われる。騎楼の緩衝性は、道路と建物間の直交方向のみの性質を持つが、辺街の緩衝性は、直交だけではなく、道路と平行方向の緩衝性、つまり辺街を歩行者は歩道として歩いたり、自転車やバイクが逆行・回転したりできる空間としての性質も持つと言えるだろう。したがって、騎楼の緩衝性と辺街の緩衝性は、それぞれの機能を果たして、今の台湾都市の現象と繋がっているのではないかと考えられる。

6. 結論

6-1 本研究のまとめ

<辺街>領域でとられる行動は、法の視点から見ると道路の通行の支障になる可能性があるが、一方で使用者にとっては、融通をつけた、柔軟な環境の使い方であるということもできるだろう。

騎楼に関しては今まで様々な場で都市「問題」として議論されてきたが、本研究はあえて環境行動の特徴によって騎楼と辺街の利点を提示した。ただ、筆者は辺街空間は緩衝的な領域性を持つと主張したが、使用者にとって完全に問題が無い空間とは断言していない。人と車が共に同じ道を通ることは、もともとある程度お互いに対するリスクが存在している。ただし多種の使用者を完全に切り離れた道路環境へと作り変えるのは、道路の空間に限られている台湾都市には執行上の難点があり、使用者にとっては必ずしもいいこととは言えない。「人々がちゃんとマナーを持ち、しっかり法律で管理すれば改善できるのではないか」という考えを持つ者もいるが、元々法律やルールは人間の行動を制限するより人間の生活の豊かさを保障するものとしてある必要があると筆者と考えている。そのため辺街の領域性を含む人々の行動習慣に基づいて、改めて「なぜ人はここでこんな行動をするだろう」という出発点で、騎楼そして辺街のあり方を考えていきたい。

今までの騎楼研究と違うところは、本研究の目的は、騎楼の「問題」を解決したり具体的な提案をしたりするより、騎楼における様々な行動に違法性の考えを入れず、人々はどのようにその空間を使うかに関してもう一度確認することをメインにした。なお、本研究で語った<辺街>については、厳密な統計や実験とは違い、

騎楼に対して新たな視点を提供したいという思いから作成した。様々な議論に囲まれる騎楼のこれからのあり方にもう一つの視点を提供し、都市計画者或いは公の方が都市の再計画を行う際に参考してもらいたいと考える。

6-2 今後の課題

6-2-1 行動によって形成された辺街は、行動がない時にも成り立っているのか。

住居の研究には、盆栽や植木、或いは表札など物などを住居の前置くことにより領域は示される。この時住民がいなくても、置かれた物によりという領域性を感じることができる。しかし住居外のマーカーは、特定の人(住民)が置くものなので、辺街のように不特定の人による駐輪や駐車「置物」とは意味が多少違うと思う。人がいない辺街には、店側の看板などの物があり、店側の領域は成り立っていると考えられるが、辺街としての領域ははたして成り立っているかどうか疑問が残されている。

6-2-2 辺街で歩く歩行者は、仕方なく辺街を歩くのか。

観察側の反対にある大学周辺は近年歩道は整備されている。それにもかかわらず、歩道の外側にある車道を歩く歩行者が少なくないのである。つまり、歩道は整備されても、車道の外側で歩く歩行者は完全に消えないという現状が存在している。もちろん、学校周りの歩道と騎楼のセッティングは完全に一緒ではないため、まだ検証が必要である。しかしその現状に基づいて、辺街で歩く歩行者にとって、たとえ騎楼は歩道として整備がきちんとされても、辺街での歩行行為は消えるかどうか懐疑的である。辺街は歩行者にとって、仕方なく歩くという以上の意味を持っているかもしれないと考えている。

おわりに

本研究は騎楼から発端して、主に辺街を主に注目して環境行動観察を行った。今後 possible の課題としては、さらに辺街空間と騎楼空間の環境行動的繋がりを注目して、実際の使用者の視点から騎楼と辺街のこれからのあり方をより明確にできればと考えている。

参考文献

- 1) 黄義魁、台湾騎樓空間之研究、1984
- 2) 王曉玲、街道行為場域中物件之溝通性、1998
- 3) 蔡瑞麒、台湾街道空間的公共性研究—以永和市為例、2002
- 4) 中澤潤、大野木裕明、南博文、心理学マニュアル—観察法、北大路書房、1997